同志社京田辺会堂光館（HIKARI-KAN）ラウンジ展示
第20期展
「新島襄のGo Global－海を越えて－」

〔開催概要〕
同志社京田辺会堂光館（HIKARI-KAN）ラウンジ展示第20期展
「新島襄のGo Global－海を越えて－」

会期：2024年9月30日～2025年3月下旬
会場：同志社京田辺会堂光館ラウンジ（同志社大学京田辺キャンパス）
主催：同志社大学キリスト教文化センター
協力：同志社大学同志社社史資料センター

表紙資料：小野功男画「アメリカ上陸」1965年

ごあいさつ

ようこそ、同志社京田辺会堂光館（HIKARI-KAN）ラウンジ第20期展示へお越しくださいました。

2015年3月の献堂以来、本館で1セメスターごとに行ってきた一連の展示は、一般的な学部学生の在学期間である4年間（8セメスター）を1タームとした企画です。

3ターム目の2年目（第4セメスター）にあたる今回の第20期展示では、2ターム目の第12期のテーマ「新島襄のGo Global－海を越えて－」を踏襲して、建学の精神・理念の1つである「国際主義」の原点と意義についてあらためて振り返ります。

創立者・新島襄は、明治十年代半ばの演説草稿の中で、「人を愛するは、一国に限らず世界の人をも人と見なしてこれを愛せば、決して区域の狭き者にあらず」（同志社編『新島襄教育宗教論集』岩波文庫 2010年 298頁）と述べています。

キリスト教に裏打ちされた「愛人主義」、すなわち一国にとどまらず、人種、民族、国家を超えて、同じ人間同士として、隣人同士として愛し合い、国家から独立した民間の力で世界に貢献することが、同志社の「国際主義」なのです。キリスト教と「愛人主義」に裏打ちされた「国際主義」こそが、他大学の「国際主義」と決定的に異なる点であることを肝に銘じていただきたいと思います。

新島が提唱した「愛人主義」に依拠する「国際主義」は、150年の時空を超えて、混迷する現代に生きる私たちにとり、とても力強い道標となり得ます。「愛人主義」こそが、ウクライナとロシア、パレスチナとイスラエルの間の争いの根底に存在する狭隘な「愛国主義」を克服する力となるのではないでしょうか。

今回の展示は、「海」を、新島が新しい世界に踏み出す際の扉ととらえ、海を越えるたびに新島が何を、どのように、どのような心情で受け止め、どのような考えを抱いてきたのかに焦点を当てています。今の大学生の皆さんとほとんど変わらない、当時21歳の新島が、海を越えて出会った異文化への驚きを綴った「函楯紀行」（レプリカ）や、29歳になって岩倉使節団の随行員として欧州を歴訪した時の気づきを記した「英文日記」（レプリカ）などからは、新島が海を越えて学び続けた先に今日の同志社があるということが感じられることでしょう。

ちなみに新島の“Go Global”の夢を具現化する器として、2017年度に同志社大学初の海外キャンパスである「同志社大学テュービンゲンEUキャンパス」（EUキャンパス）がドイツ・テュービンゲン大学のご厚意によりその構内に設置されました。今回の展示に触発された方は、留学を通して新島の異文化体験を追体験していただきたいと思います。EU キャンパスも留学先の選択肢のひとつであると考えていただければ幸いです。

キリスト教文化センター所長
和田喜彦
2024年9月

目 次

ごあいさつ…………………………………………………… 1

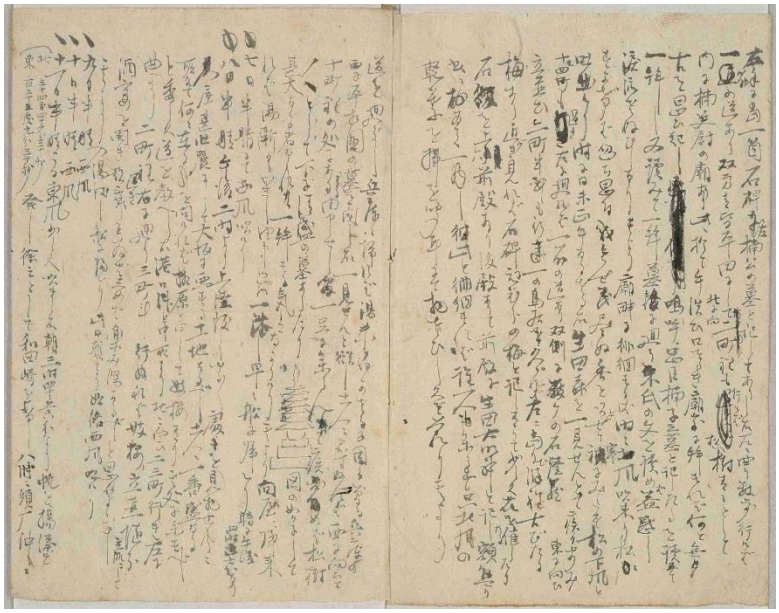
展示テーマ「異文化との対話」…………………………… 3

展示テーマ「まなびの実現」……………………………… 13

資料リスト・使用写真リスト……………………………… 23

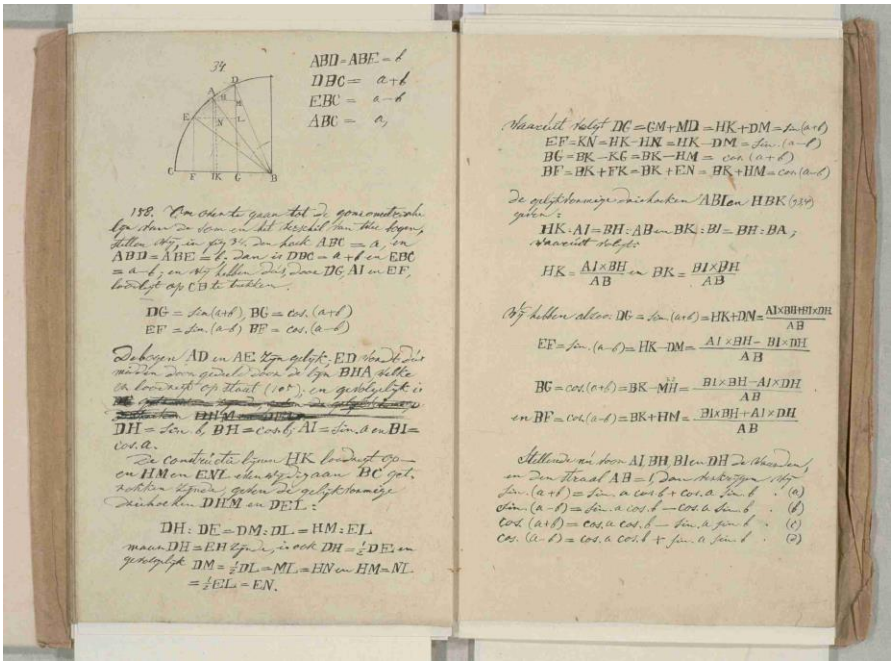
展示テーマ
「異文化との対話」

江戸の安中藩邸で誕生して以来、新島襄の生活の中心は江戸でしたが、青年を迎えた新島は、海を越え新しい文化や文物と出会います。ここでは、海を越えて未知との遭遇の中で新島がどのようにその事象を受け取り、感じ、行動したのかを資料を通じて考えます。



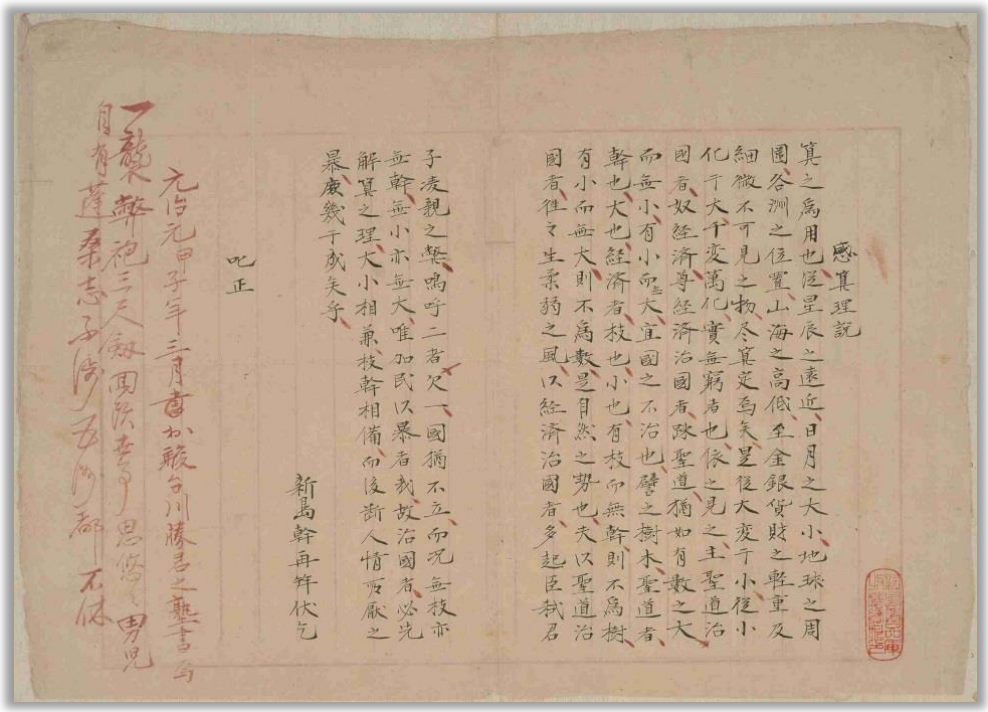
兵庫玉島往復紀行（複製）　1862 年　1 冊　27×19cm

新島が 1862 年（文久 2）11 月から翌年にかけて、約 2 カ月間備中松山藩が所有する洋式帆船快風丸に乗船し、江戸と玉島間の往復航海に同船した時の手記です。展示部分は兵庫で下船し、楠木正成と平清盛の墓を訪れた記録で、当時の歴史上の人物に対する新島のイメージが彼の行動から見て取れます。



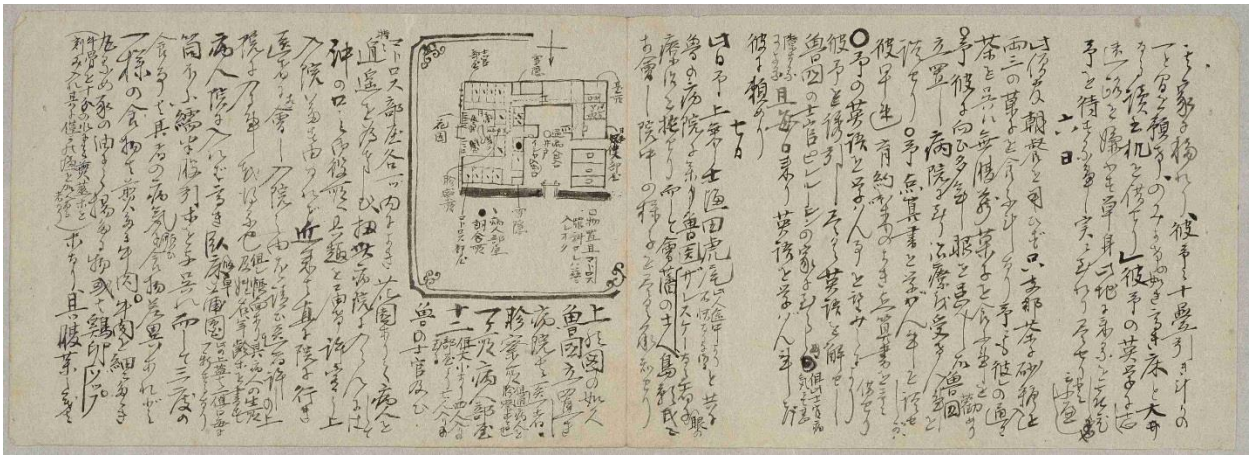
航海術のノート（複製）　江戸時代後期　1 冊　25.5×20cm

新島がオランダ語で書き残した航海術に関するノートです。展示部分は三角法の加法定理に関する部分です。新島は 13 歳ごろから蘭学を学び始め、その後オランダ語や英語を通じて物理学や数学などを学びます。そして、17 歳になると、幕府の軍艦操練所に入り、航海術を学び始めました。当時は鎖国状態でしたが、そのような状況下でも、新島は外国語を通じて外国の文物に触れていました。



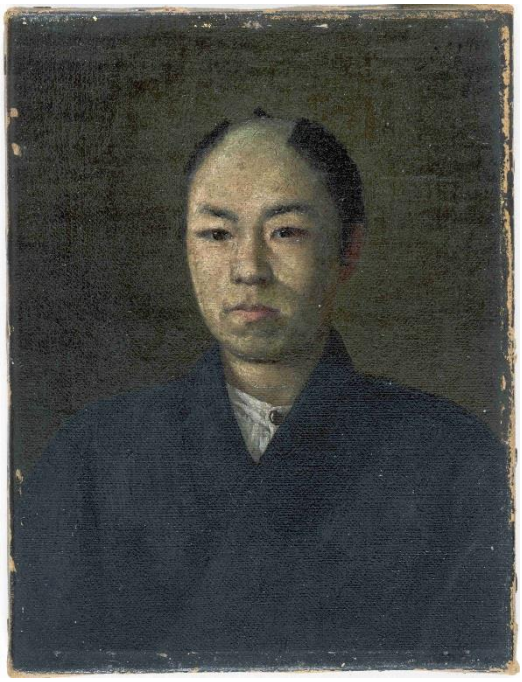
感算理説（複製）1864 年（元治元）　1 枚　26×37cm

新島は再度快風丸に乗り込み、函館へ向かう直前の心情をこの資料の末尾に漢詩で書き残しました。海を越え、新しいものを求めて行動を起こす際の新島の気持ちが表れています。新島の父・民治が安中藩に届けた文書の写しによれば、新島の函館行きの理由は、同地の武田塾で学び、同時に同塾に関係する外国人からも学ぶことでした。そうした将来を見据えた決意のような感情を表した漢詩です。



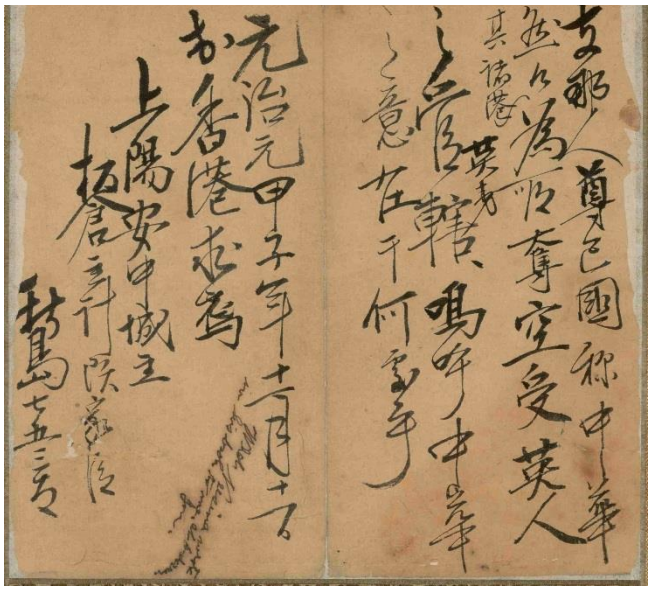
函楯紀行（複製）　1864 年　1 冊　16.5×22.5cm

新島は函館に滞在した 2 カ月弱の間、開港地・函館の現状を日本との対比で見比べてきました。そのときの記録が手記として残されています。ここでは、新島自身も目の治療に訪れたロシアの病院に関する彼の記述を紹介しています。新島が書き残したものは、彼が人づてに聞いた当時のロシア病院の現状と、それを踏まえて新島が抱いた感想です。新島の、異文化と自文化に対する視点が読み取れます。



新島襄肖像画（複製）　1890 年　1 点　20×15.6cm

函館から密出国する前日 6 月 13 日に撮影した写真を元に、原田直次郎が描いた肖像画。この時に撮影した写真原板（ガラス）は、新島家に送られ、その後同志社が保存するに至ったと考えられます。近年、この写真を撮影した人物が、ロシア帝国初代日本駐在領事ヨシフ・ゴシケヴィチではないかと指摘されました。

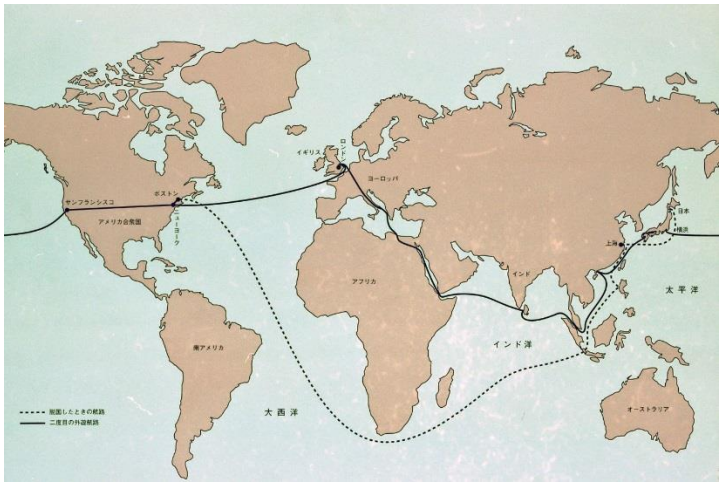


漢訳聖書扉の書込み（複製）　1864 年　1 幅　20.8×22.3cm

新島が購入した漢訳聖書の空いたページに書き込んだとされる漢詩です。この言葉を記す前に、新島は中国の上海と香港を実際に見ています。アヘン戦争後、列強諸国の支配下に置かれた中国の現状を嘆いた漢詩です。

＜新島襄の Go Global＞

2 度の快風丸乗船時の航路



最初の密出国時（点線、1864～65 年）と 2 度目の欧米行き（実線、1884～85 年）の航路

新島の生まれは江戸であり、青年時代までは江戸が活動の中心でした。しかし、蘭学を通じて外国の諸科学を学び、アメリカの地理書『連邦志畧』や『ロビンソン・クルーソー』の日本語訳に刺激を受けた新島は、やがて快風丸での初めての航海をきっかけとして活動範囲を広げていきます。その範囲は、密出国以後、日本を越えて、世界へと広がりました。

＜江戸での学び＞

「万世御江戸絵図」

新島襄は 1843 年（天保 14）江戸城東側にある安中藩邸で生まれました。以来、21 歳の時に函館に行くまで、この場所を主に生活の拠点としています。この間、新島は漢学や書、絵、蘭学そして、自然科学も学びました。なかでも、江戸の築地にあった軍艦操練所で、約 2 年間航海に必要な算術を中心とした自然科学を学びました。

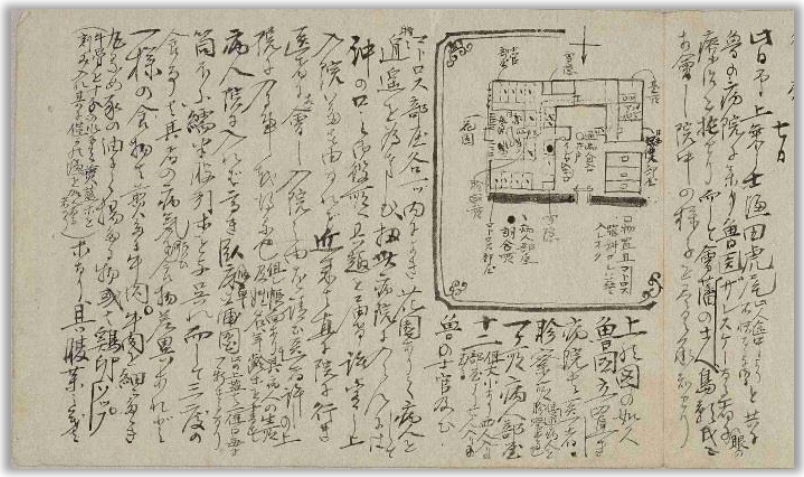
＜江戸の外へ＞

快風丸模型

ワイルド・ローヴァー号模型

新島を江戸の外の世界へと導いた船が3隻あります。備中松山藩が所持していた快風丸と、アメリカ船籍のベルリン号とワイルド・ローヴァー号です。快風丸は、江戸と玉島（岡山県）の往復航海を通じて新島に江戸の外の世界を知らしめました。再度、乗船することになったときには、新島を開港地の函館に運びます。一方、ベルリン号とワイルド・ローヴァー号は函館から密出国を敢行した新島をアメリカへと導きました。これらの船は、航海術などを通じて自然科学を学ぶだけでなく、新しい文明との出会いをつなぐ役割を担いました。

＜函館での学び＞

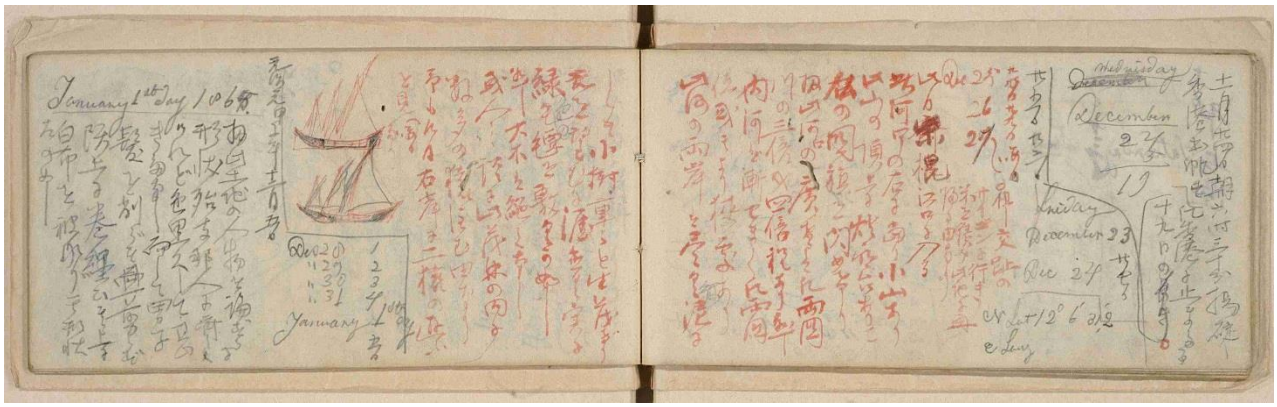


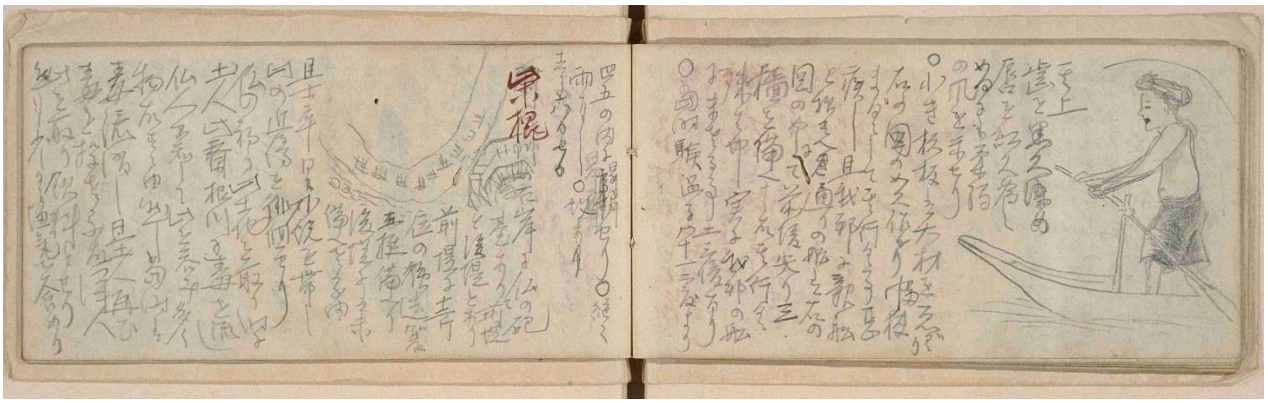
新島襄「函楯紀行」（部分）

原田直次郎作「新島襄肖像画」

21歳を迎えた新島は、安中藩から許可を得て函館に向かいます。当初は武田塾で学ぶ予定でした。理由は外国人と接触し、学ぶことができると考えたからです。しかし、塾長である武田斐三郎が不在であったため、最終的にはロシア正教司祭ニコライのもとに身を寄せ、日本語を教えながら学ぶことになります。この間に診察を受けたロシア病院が強く印象に残ったようです。医療費無料、最新の設備、充実した患者へのケアを知る一方で、その結果、函館の人心がロシア人に向かい、後年の憂いとなるのではと危惧を抱きました。新島が密出国を敢行するのはこの約1カ月後です。

＜新島襄がはじめて見たアジア＞





新島襄筆「航海日記」1864-65 年　サイゴンに関する記録

新島は 1864 年（元治元）6 月 14 日（旧暦）に函館を密出国し、翌年 7 月 20 日（旧暦閏 5 月 28 日）にボストンに到着しました。其の間、およそ一年間で見聞きしたものを新島は挿絵入りで日記に書き残しています。特にフランス統治下のサイゴン（現・ベトナムのホーチミン）に関して詳しい記述があります。その内容は、人々の風俗、生活、フランス支配下における現地の人々の抵抗、当時のフランスの軍備など多岐にわたります。

＜アメリカ上陸＞

小野功男画「アメリカ上陸」1965 年

新島が乗船したワイルド・ローヴァー号は、1865 年 7 月 20 日がアメリカのボストンに入港しましたが、新島には引き取り手が無く、しばらくは船上で生活していました。到着から約 3 か月後の 10 月 11 日、船主ハーディーが新島と会い、密出国の理由を文章化させるために新島を港近くの海員ホームに滞在させ、3 日間の猶予を与えます。この時に書いた文章（脱国の理由書）にハーディーは感銘を受け、新島を引き取ることになります。そして、新島はこの約 2 週間後にフィリップス・アカデミーに入学し、アメリカでの学びを始めました。

＜フィリップス・アカデミー時代の新島襄＞

フィリップス・アカデミー　フィリップス・アカデミー時代の新島襄

新島がアメリカで最初に進学した学校がフィリップス・アカデミーです。1865 年 10 月 31 日に入学した新島は、およそ 2 年間、自然科学を中心に学びました。また在学中に洗礼を受け、正式にクリスチャンとなっています。1867 年 6 月にアカデミーを修了すると、アーモスト大学へ進学しました。

同志社京田辺アドベント礼拝
（キリスト教文化センター主催）

これまで同志社新島記念講堂で31回にわたり実施されてきた「同志社京田辺クリスマス燭火賛美礼拝」に代わり、2023年度より実施されている礼拝で、京田辺キャンパスの同志社京田辺会堂言館（KOTOBA-KAN）礼拝堂において、同志社の法人内諸学校と同志社大学で創り上げる、クリスマスを待ち望むアドベントの礼拝です。

礼拝内では、牧師からのメッセージや、聖歌隊やゴスペルの歌声、アンサンブルやハンドベルの音色など、多彩なプログラムにより構成されております。

京田辺クリスマス・イブ礼拝

学生聖歌隊の合唱

学生スタッフによる降誕劇

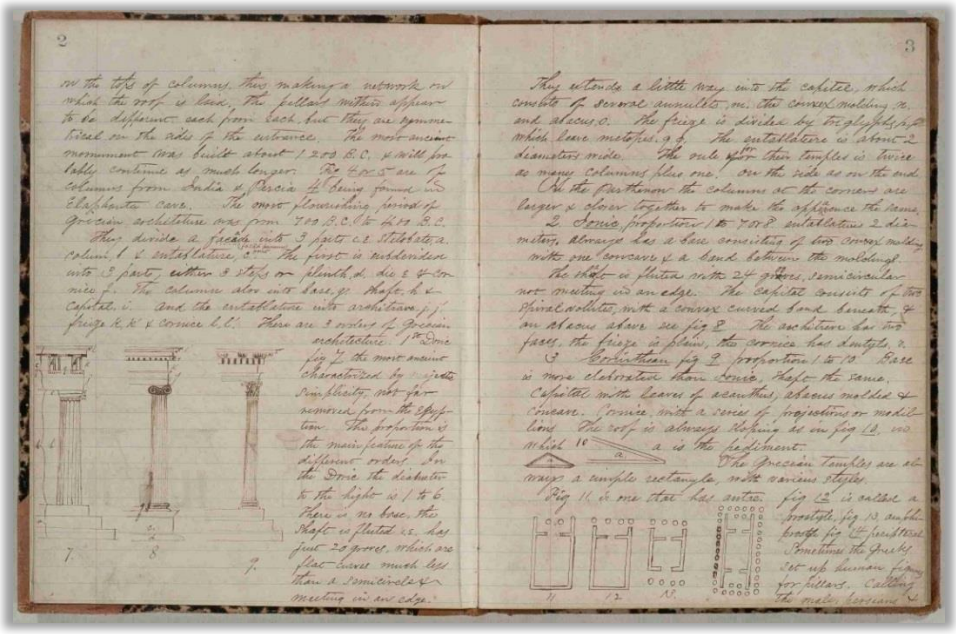
クリスマス・イブ礼拝

キリスト教文化センターでは、クリスマス・イブ礼拝を両校地で行っています。京田辺校地では、同志社京田辺会堂が献堂された2015年に初めてのクリスマス・イブ礼拝を行いました。大学のキャンパスで迎えるクリスマスとして、学生、教職員だけではなく、広く地域の方々も集って、讃美歌を歌い、聖書のことばに耳をかたむけ、イエス・キリストの降誕をともに喜び、祝っています。

なお、今出川校地では、同志社教会との共催で同志社礼拝堂において2013年から実施しています。

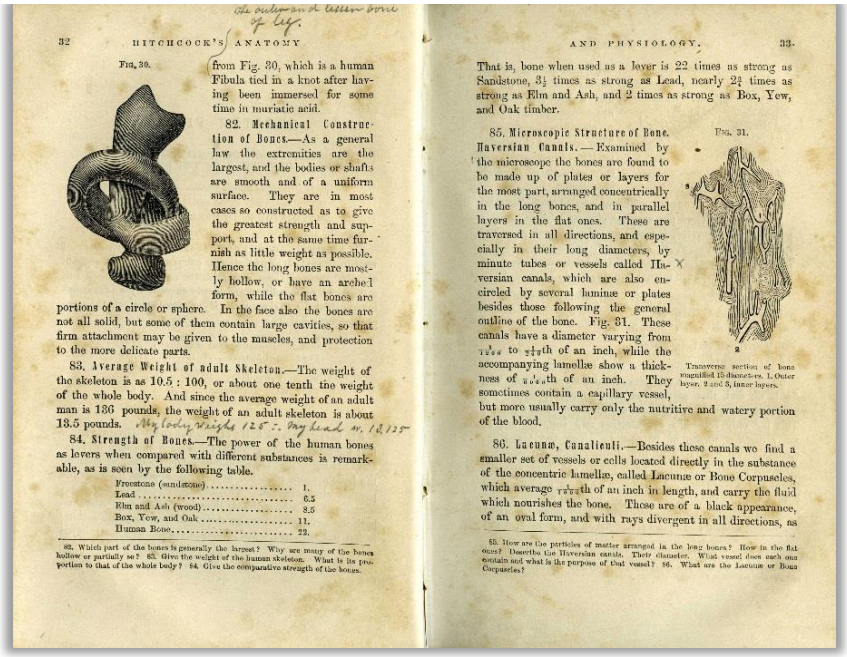
展示テーマ
「まなびの実現」

アメリカに到着した新島は、約10年間アメリカの中・高等教育機関で学びました。さらに、この間、ヨーロッパ各地の教育視察を行う機会に恵まれました。アメリカでの学びを通じて教育の重要性を認識し、ヨーロッパでの学びを通じて、文明の外側に見えている知識や技術だけでなく、その内側にあるキリスト教も同時に学ぶ必要があると考えるようになったと、新島は後に述べています。そして、このまなびの実現のために開かれた学校が同志社英学校であり、創設しようとしたのが同志社大学でした。この軌跡を資料から振り返ります。



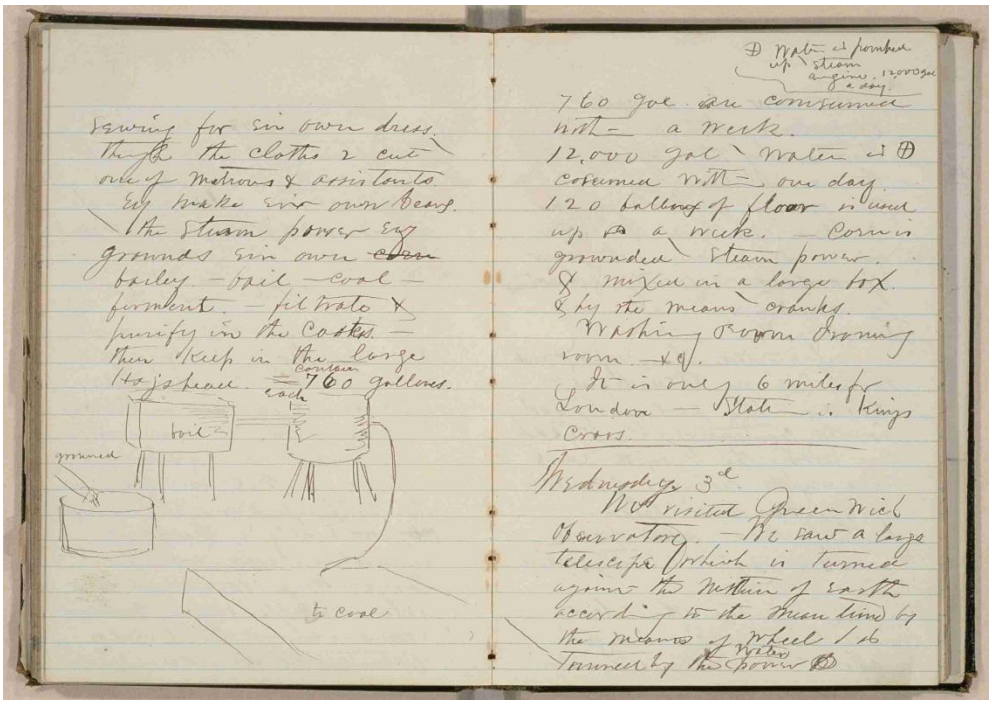
建築史ノート（複製）　1860年代後半　1冊　26.5×20cm

新島がアーモスト大学時代にまとめたと考えられるノートです。ところどころに説明に適した挿絵が挿入されています。新島がアメリカで自然科学を広く学んだことを示す資料のひとつです。



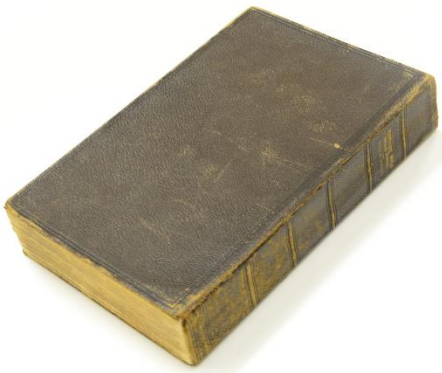
Elementary Anatomy and Physiology（複製）　1860年　1冊　20×12.4cm

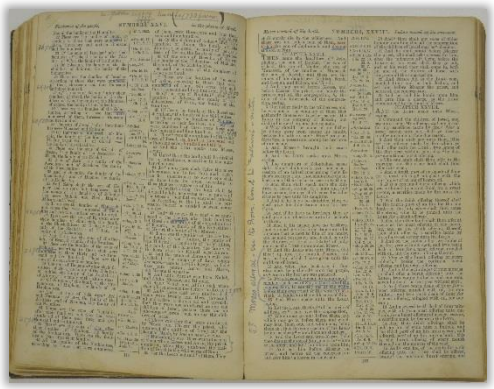
新島がアーモスト大学時代に使用していた生理学・解剖学の教科書です。展示しているページは人骨に関する分野です。「83. 成人の人骨の平均的な重さ」という項目では、新島が自身の体重125ポンド（約56.7kg）から骨量13.125ポンド（5.95kg）を導き出した書き込みがあります。



英文日記（複製）1872 年　1 冊　19.8×13cm

1872 年新島襄が、在米中、岩倉使節団随行員としてヨーロッパ諸国を初めて歴訪した時の 3 カ月半にわたる記録です。訪問国はイギリス、フランス、スイス、ドイツ、ロシア、オランダ、デンマークで、主な目的は教育関係施設の視察でした。日記を詳しく見ると、教育施設以外にも歴史的文化的遺産、博物館・美術館などを訪問しています。今は博物館となっているグリニッジ天文台を訪問したのもこの時でした。



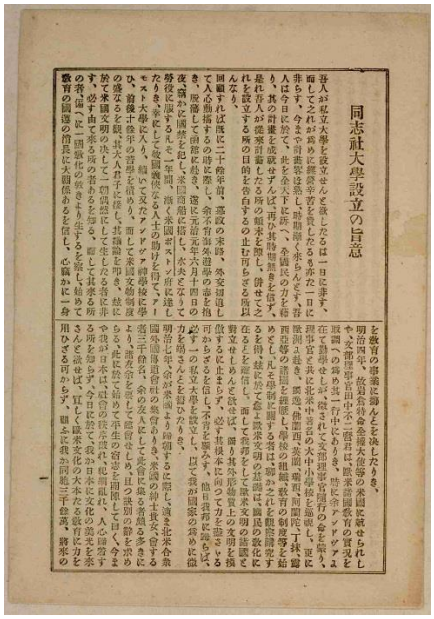


新島襄旧蔵聖書（複製）年不詳　1 冊　21×14cm

新島がアメリカに到着した翌年に、ハーディーが後見人を務めていた J.M.シアーズ（Joshua Montgomery Sears, 1854～1905）より贈られた英訳聖書。これより前に新島は漢訳聖書を手にしていますが、それは一部でした。英文聖書を手にしたことで、初めて全文を目にすることになりました。この聖書の中にある、手書きのメモや印は、新島のキリスト教に対する知的好奇心や信仰の深化過程を示しています。

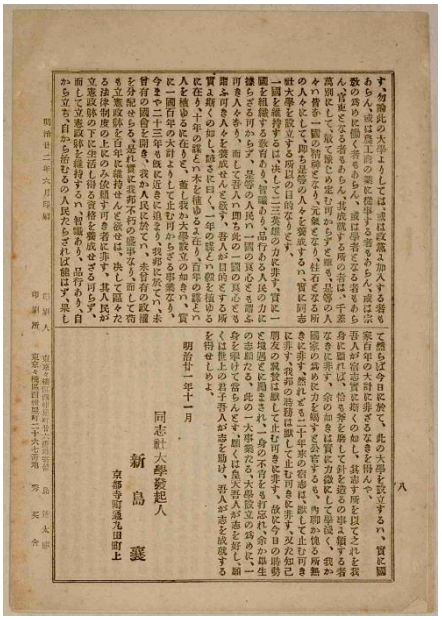
自責の杖（複製）年不詳　3点　最大60cm

打掌で折れたとされる新島の杖です。1880年（明治13）4月、当時2年生の上級組と下級組の合併決議を発端とする学内ストライキが発生し、学内が混乱しました。新島は同月13日の朝礼の席で、一連の騒動は学生や幹事の責任ではなく校長である自分の責任である、として自らの掌を杖で打ちつけました。この衝撃的な事件を物語る杖は、新島のキリスト教信仰にかかる贖罪感、そして教育観を伝える象徴として、これまで受け継がれてきました。



同志社大學設立の旨意

明治四年、故岩倉公使等の米國に就せられし
や、文部理事官田中不二麿君は、歐米諸國教育の實況を
取調（の為め当）ア中にありき、時に余アメリヴァ
在て勤學せし頃、既に北米合衆國の大中小學校を歴觀し、
理事官と共に、北米合衆國の大中小學校を歴觀し、
陸測官と共に、歐洲諸國の大中小學校を歴觀し、
西歐諸國の諸國を歴觀し、學校の組織、教育制度、
めてし、凡て學制の國家に關する者は、
るを特、殊に於て基督教の教化に
在ると、敬神愛人の道、
敷立せしめんと欲せば、
改する能に止まらず、必ず其根本に向つて力を盡さ
可からざるを信じ、不肖を顧みず、他日我邦の為め
必ず一の私立大學を設立し、以て我が國家の資
力を陪さんことを期ひたりき、
明治七年、余が米國より歸朝するに際し、
國外國籍官府の勧奨あるも、米國の紳士貴人、
当三千餘名の親戚、
より、
ひ、
盛なる親戚、
於て米國文明の
す、必ず自
の者、
教育の國運の
を教育の骨髄に歸んとを決したりき、
明治四年、故岩倉公使等の米國に就せられし
や、文部理事官田中不二麿君は、歐米諸國教育の實況を
取調（の為め当）ア中にありき、時に余アメリヴァ
在て勤學せし頃、既に北米合衆國の大中小學校を歴觀し、
理事官と共に、北米合衆國の大中小學校を歴觀し、
陸測官と共に、歐洲諸國の大中小學校を歴觀し、
西歐諸國の諸國を歴觀し、學校の組織、教育制度、
めてし、凡て學制の國家に關する者は、
るを特、殊に於て基督教の教化に
在ると、敬神愛人の道、
敷立せしめんと欲せば、
改する能に止まらず、必ず其根本に向つて力を盡さ
可からざるを信じ、不肖を顧みず、他日我邦の為め
必ず一の私立大學を設立し、以て我が國家の資
力を陪さんことを期ひたりき、
明治七年、余が米國より歸朝するに際し、
國外國籍官府の勧奨あるも、米國の紳士貴人、
当三千餘名の親戚、
より、
ひ、
盛なる親戚、
於て米國文明の
す、必ず自
の者、
教育の國運の



す、勿論此の大學よりしては或は改革に加入する者も
あらん、或は既に他の塾に從事する者もあらん、或は宗
教の為め此の塾に働く者もあらん、或は學者となる者もあら
ん、官吏となる者もあらん、或は商賈となる者もあらん、
或は農となる者もあらん、其成就する所の者は、千差
萬別にして、最て保じむ可からずと雖も、其成就する所の人
々は皆一國の精神となり、元氣となり、柱石となる所
の人々にして、國家の人々を養成するハ、實に同志
社大學を設立する所以の目的なりき。
國を組織するは、決して三英傑の力に非ず、實に一
國の人々なり、品行ある人民の力に
據て、
可き人々なり、而して吾人の國の為め
國家の人々を養成せんと欲す、
人を植ゆる能在り、
今まや二十三年の大計より、
今まや二十三年の大計より、
曾て存の國會を開き、我が人民に於てハ、未
曾て存の政權
も立憲政体を百年に維持せんと欲せば、決して國々た
る法律制度の上にのみ依頼す可き者に非ず、其人民が
立憲政体の下に生活し得る資格を養成せざる可らず、
而して立憲政体を維持するハ、智識あり、品行あり、自
から立ち、自から治むるの人民たらざれば能はず、果し
て然らば今日に於て、此の大學を設立するハ、實に國
家百年の大計に非ざるなきを信ずるのみ、
吾人の宿志實に斯くの如し、其志す所を以てこれを我
邦に試れば、恰も巻を勝して針を迫るの事と類する者
なきに非ず、余の如きは實に力微にして學淺く、我が
國家の為めに力を竭すと雖も、内憂外患の來る所無
きに非ず、況や我邦の運命は實に同志社大學の成
敗如何に關係して止む可きに非ず、又た知己
朋友の親賢は勝して止む可きに非ず、故に今日の形勢
と地勢とに鑑まされ、一身の不肖を省みず、命生
の志願たる、此の一大學校を設立し、一
身を犠牲にして、
吾人が志を成就する
を待せしめよ。

明治廿一年十一月

同志社大學發起人
新島襄
京都寺町通九田町上

明治廿一年六月印刷
印刷所　東京牛込区市谷加賀町一丁目十番地　島崎太郎
東京牛込区市谷加賀町一丁目十番地　秀英舎

同志社大學設立の旨意（複製）1888年　1冊　21.5×14.8cm

1888年（明治21）11月から配布されたパンフレット。新島襄が骨子をつくり、徳富蘇峰が文章化しました。この内容は、全国の新聞や雑誌に掲載され、国内で広く広報されました。この中で新島が訴えた大学設立の目的は、「一国の良心」を育てることでした。その背景には、新島が欧米で実地体験したことがあります。

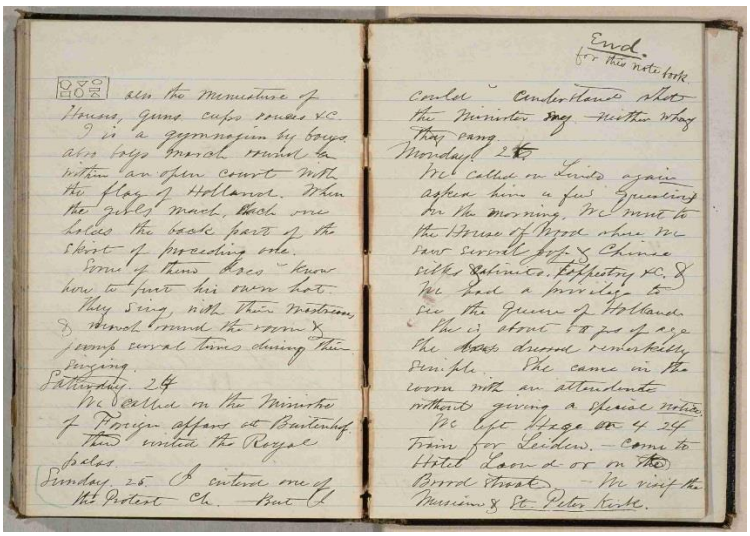
＜アーモスト大学時代の新島襄＞

新島襄が寮生活を送ったNorth College（中央）とジョンソン・チャペル（奥）

ジョンソン・チャペル内部

1867 年 6 月にフィリップス・アカデミーを修了した新島は、約 3 カ月後アーモスト大学に進学します。そして、3 年間、自然科学を中心に学び、当時のアメリカの上流階級の子弟と一緒に教育を受けました。そして、修了時には理学士（Bachelor of Science）の学位を授けられました。1870 年 7 月に大学を修了した新島は、神学の専門学校であるアンドーヴァー神学校に進学しました。

＜1 回目のヨーロッパ訪問＞



End.
for this note book.

also the manufacture of Houses, guns, caps, swords &c.
I is a gymnasium by boys also boys march round to music an open court with the flag of Holland. When the girls march, each one holds the back part of the skirt of preceding one.
Some of them does know how to put his own hat.
They sing, with their mistress, & march round the room & jump several times during their singing.
Saturday. 24
We called on the Minister of Foreign affairs at Binnenhof then visited the Royal Palace.
Sunday. 25 We entered one of the Protest Ch. — But the Coolet understand what the Minister say — Neither what they sang.
Monday 26
We called on Lindo again asked him a few questions for the morning. We went to the House of Wood where we saw several Jap & Chinese silks & Chinese, Japanese, &c. & We had a privilege to see the Queen of Holland. She is about 18 yrs of age. She dressed remarkably simple. She came in the room with an attendant without giving a special notice.
We left Hague on 4 24 Train for Leiden. — Come to Hotel Lion d or on the Brood Street. — We visit the Museum & St Peter Kirk.

英文日記（1872 年）オランダ王妃に偶然遭遇した記録

アンドーヴァー神学校時代の新島襄

新島の 1 回目の訪欧は、岩倉使節団の文部理事官・田中不二麿の視察に通訳として同行した時でした。訪問先は、イギリス、フランス、スイス、ドイツ、ロシア、オランダ、デンマークです。視察の対象は各国主要都市の教育施設やその教育の実施状況ですが、イギリスではグリニッジ天文台を見学し、オランダではオランダ王妃に遭遇するなど、各国の学問や文化を象徴する施設も訪問しています。のちに新島はこの時諸国を見聞した経験が、外国の文明の外側だけを学ぶのではなく、その内実も合わせて取り入れるべきという考えを呼び起こさせ、知徳併行を実施する学校設立を考えるようになったと述べています。

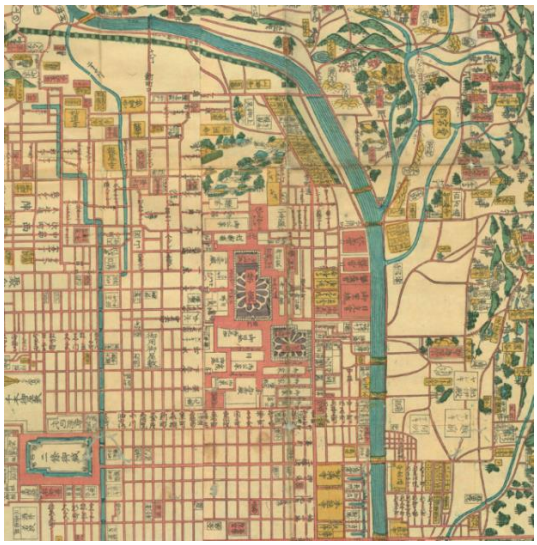
＜ラットランド演説＞

油彩画「ラットランド演説」

グレイス教会

アメリカン・ボードの準宣教師として日本に派遣されることになった新島は、アメリカのヴァーモント州ラットランドのグレイス教会で開催されたボードの第 65 回年次総会最終日に挨拶のため登壇しました。この時初めて、新島は日本でのキリスト教主義学校設立の志を吐露します。その志に感銘を受けた聴衆から、その場で計約 5,000 ドルの寄付の約束を得ました。この寄付は、後に同志社の開校・運営に活用されたと言われます。

＜幕末の今出川周辺＞

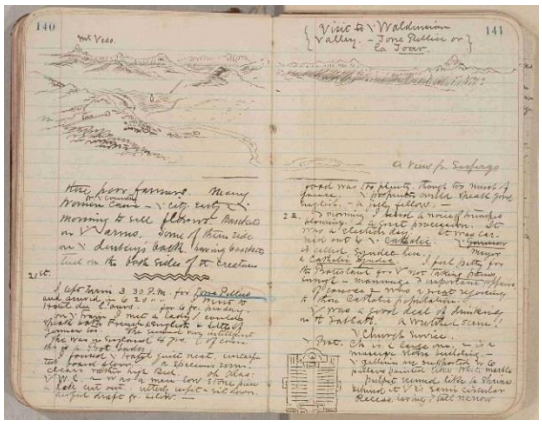


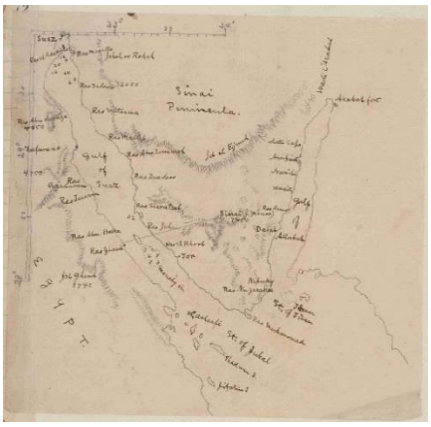
「文久改正新増細見京絵図大全」部分 1863 年　国立国会図書館デジタルコレクションより借用

現在の今出川キャンパスは、幕末には薩摩藩邸や公家屋敷が並ぶ場所でした。そして、その北には京都五山第 2 位の相国寺が、南には禁裏御所と公家屋敷が並ぶ、日本の伝統文化を象徴する空間（現在の京都御苑）でもあります。同志社はこのような特異な場所に 1876 年（明治 9）キャンパスを構えることになりました。

同志社が開校する 6 年前、江戸から明治へ年号が変わる時に京都の町に大きな変化が起こります。象徴的な変化は 1869 年（明治 2）東京奠都（明治天皇の東京行幸）です。これにより禁裏御所とその周辺の公家屋敷の多くは空き家となり、かつての優雅さを失っていきます。また、京都の寺院も明治新政府の土地と人民整理政策の影響を受け、弱体化していきます。そのような周囲の状況下でキリスト教主義学校として同志社はこの地に移りました。

＜2 回目の欧米訪問＞

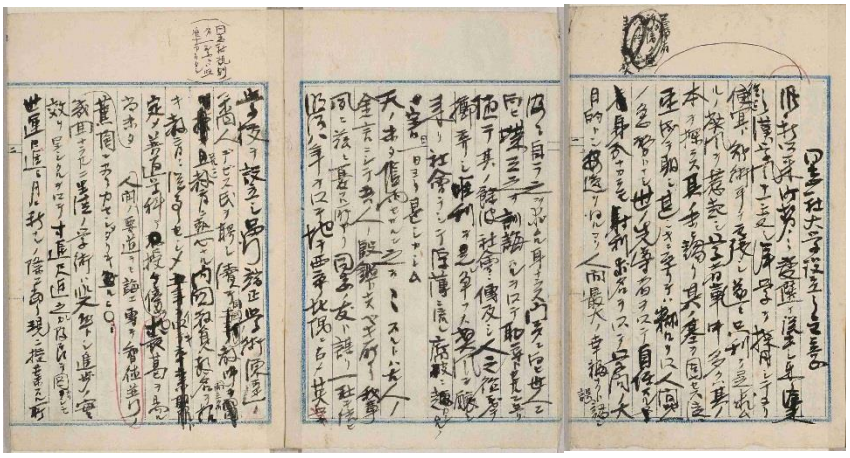


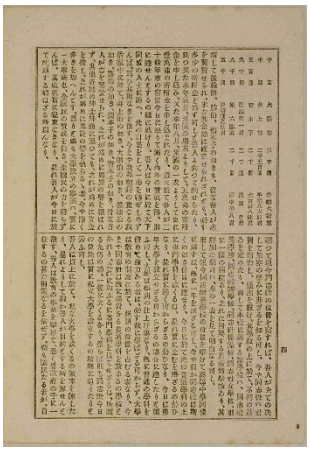


英文日記（1884 年）イタリアのトレ・ペリチェ滞在時の記録（左）と、シナイ半島のスケッチ（右）

日本に帰国してからちょうど 10 年となる 1884 年（明治 17）、新島は再び欧米を訪問します。その目的は大学設立への理解と寄付金の獲得、そして、療養でした。4 月に神戸を出発した新島は 5 月にイタリアに到着し、ローマ、ヴァチカン、フィレンツェ、ジェノバ、トリノと経由して、療養の地であるトレ・ペリチェに向かいます。ここで 5 週間ほど療養した後、ミラノを経由し、死を覚悟したサンゴタール峠を越えてスイスに入ります。スイスではルツェルン、チューリッヒ、バーゼルを訪れました。その後、アメリカではボストンを中心に積極的に活動していたようで、魚釣りなどに興じる一方、留学中の同志社出身者や旧知の友人・知人と旧交を暖め、また著名な大学の総長・教授と交流しました。1885 年（明治 18）12 月に帰国するまで 1 年 8 カ月の旅程でした。

＜同志社大学設立運動＞





左、「同志社大学設立之主意之骨案」冒頭部分（1882 年）　右、大口寄付者の一覧（1888 年）「同志社大学設立の旨意」所収）

大学設立運動の端緒は、新島が 1882 年（明治 15）に奈良県の土倉庄三郎から法学部設置を条件に 5000 円の寄付の約束を得たときと言われます。その 6 年後、新島らは 1888 年（明治 21）11 月から全国の新聞雑誌に「同志社大学設立の旨意」を発表します。この発表は、1889 年（明治 22）の大日本帝国憲法公布、1890 年（明治 23）の国会開設を直前に迎えた時期でした。「旨意」ではこうした社会状況を前提として、大学教育で目指す人物像を「良心を手腕に運用するの人物」、「自治自立の人民」、「一国の精神となり、元気となり、柱石となる所の人々」、そして「一国の良心」と表現しています。これを可能ならしめるのは、これまでに同志社の各学校で実施され、世間の信頼を得てきた「徳育知育二つながら並行して、決して偏僻なる教育に陥らざる事」としています。

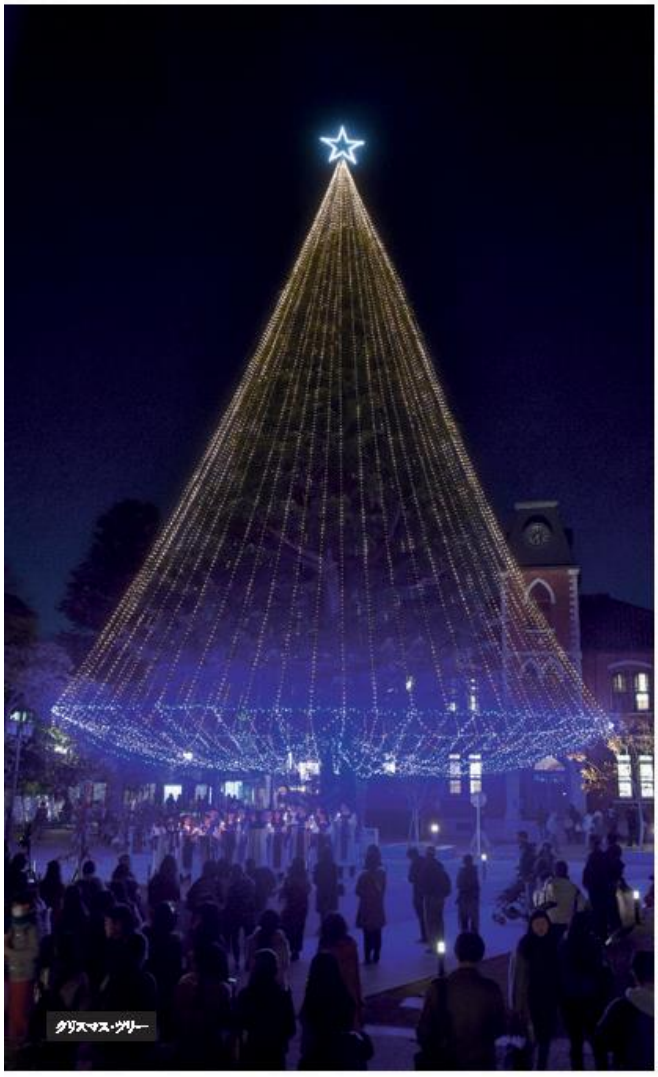
京田辺校地 言館（KOTOBA-KAN）礼拝堂

チャペル・アワー （キリスト教文化センター主催）

開催期間中、両校地の礼拝堂においてそれぞれ週3回行われており、現代に生きる人間の諸問題をめぐって、本学教職員や教会の牧師、そして様々な分野で活躍されている方々に奨励していただいています。チャペル・アワーは礼拝形式であり、オルガンの奏楽で始まり、讃美歌斉唱、聖書朗読、祈祷、奨励者によるメッセージ、祝福などが行われています。

牧師の方であれば、クリスチャンでない方々にも親しみが持てるように、日々の暮らしにまつわる話などを交えながら、イエス・キリストや聖書のことばをわかりやすく語っていただけます。また教職員の場合には、同志社におけるご自身の学びや体験をお話されることもあります。学生の皆さんだけではなく、地域の方々も参加されていますので、ぜひお気軽にお越しください。

※期間や奨励者等の詳細は、以下のウェブサイトでご確認ください。
https://www.christian-center.jp/chapelhour/index.html


クリスマス・ツリー

イルミネーション点灯式

クリスマス・ツリーと同志社礼拝堂、クラーク・チャペル

今出川校地のクリスマス・ツリー

（キリスト教文化センター主催）

キリスト教では、クリスマス前の約4週間をアドベント（待降節）と呼び、キリスト降誕を待ち望む時とされています。今出川校地ではサンクタスコートにあるヒマラヤスギがクリスマス・ツリーに変身し、京都の冬の風物詩となっています。国内最大級の高さ23mのクリスマス・ツリーにはLED電球約13,000球による飾り付けが施されます。

また、ツリーの両側にある重要文化財の彰栄館と同志社礼拝堂、そしてクラーク記念館もライトアップがされており、ツリーと合わせて美しいシルエットが冬の夜空を彩っています。

京田辺キャンパスツリー

クリスマス・イルミネーション点灯式（今出川）

クリスマス・イルミネーション点灯式奏楽

クリスマス・イルミネーション点灯式（京田辺）

京田辺校地のクリスマス・ツリーと クリスマス・イルミネーション点灯式

（キリスト教文化センター主催）

京田辺校地では、ローム記念館前に植えられたヒマラヤスギがクリスマス・ツリーの役割を担います。11月下旬から12月初旬に、毎年恒例のクリスマス・イルミネーション点灯式が両校地で行われ、同志社学生聖歌隊による賛美歌が厳かな雰囲気をつくるなか、点灯の瞬間には集まった多くの学生や市民から大きな歓声が上がります。

また、点灯式の参加者には本学理工学部のゼミ及び環境保全・実験実習支援センターの協力を得て、京田辺校地で伐採した竹で作った同志社徽章入りの燭台を参加者にプレゼントしており、毎年、好評を得ています。

資料リスト（展示品は全て複製）

資料名	作者・著編者	年代	法量（cm）	員数	所蔵先
展示テーマ「異文化との対話」					
兵庫玉島往復紀行	新島襄	1862年	27×19	1冊	同志社社史資料センター
航海術のノート（Stùùrmankunst）	新島襄	江戸時代後期	25.5×20	1冊	同志社社史資料センター
感算理説	新島襄	1864年	26×37	1枚	同志社社史資料センター
函楯紀行	新島襄	1864年	16.5×22.5	1冊	同志社社史資料センター
新島襄肖像画	原田直次郎	1890年	20×15.6	1点	同志社社史資料センター
漢訳聖書扉の書込み	新島襄	1864年	20.8×22.3	1幅	同志社社史資料センター
展示テーマ「まなびの実現」					
建築史ノート	新島襄	1860年代後半	26.5×20	1冊	同志社社史資料センター
Elementary Anatomy and Physiology	Edward Hitchcock, Jr	1860	20×12.4	1冊	同志社社史資料センター
英文日記	新島襄	1872	19.8×13	1冊	同志社社史資料センター
新島襄旧蔵聖書	－	年不詳	21×14	1冊	同志社社史資料センター
自責の杖	－	年不詳	最大60	3点	同志社社史資料センター
同志社大学設立の旨意	新島襄・徳富蘇峰	1888	21.5×14.8	1冊	同志社社史資料センター

使用写真リスト

ポスターパネルタイトル	写真・画像	年代	所蔵先
展示テーマ「異文化との対話」			
新島襄のGo Global	2度の快風丸乗船時の航路	1993年	同志社社史資料センター
	最初の密出国時と2度目の欧米行きの航路	1993年	同志社社史資料センター
江戸での学び	「万世御江戸絵図」	1854年	同志社社史資料センター
江戸の外へ	快風丸模型	現代	同志社社史資料センター
	ワイルド・ローヴァー号模型	現代	同志社社史資料センター
函館での学び	「函楯紀行」	1864年ごろ	同志社社史資料センター
	新島襄肖像画	1890年	同志社社史資料センター
新島襄がはじめて見たアジア	新島襄筆「航海日記」	1864-65年	同志社社史資料センター
アメリカ上陸	小野功男画『アメリカ上陸』	1965年	同志社社史資料センター
フィリップス・アカデミー時代の新島襄	フィリップス・アカデミー	現代	同志社社史資料センター
	フィリップス・アカデミー時代の新島襄	1866年	同志社社史資料センター
同志社京田辺アドベント礼拝		2024年	キリスト教文化センター
クリスマス・イブ礼拝	クリスマス・イブ礼拝（今出川校地）	2024年	キリスト教文化センター
	クリスマス・イブ礼拝（京田辺校地）	2024年	キリスト教文化センター
展示テーマ「まなびの実現」			
アーモスト大学時代の新島襄	新島襄が寮生活を送ったNorth Collegeとジョンソン・チャペル	現代	同志社社史資料センター
	ジョンソンチャペル内部	現代	同志社社史資料センター
1回目のヨーロッパ訪問	英文日記	1872年	同志社社史資料センター
	アンドーヴァー神学校時代の新島襄	1870年代前半	同志社社史資料センター
ラットランド演説	油彩画「ラットランド演説」	1960年代か	同志社社史資料センター
	グレイス教会	現代	同志社社史資料センター
幕末の今出川周辺	「文久改正新増細見京絵図大全」	1863年	国立国会図書館デジタルコレクション
2回目の欧米訪問	英文日記	1884年	同志社社史資料センター
	英文日記所収シナイ半島スケッチ	1884年	同志社社史資料センター
同志社大学設立運動	「同志社大学設立之主意之骨案」	1882年	同志社社史資料センター
	大口寄付者の一覧（「同志社大学設立の旨意」所収）	1888年	同志社社史資料センター
チャペル・アワー	京田辺校地　言館（KOTOBA-KAN）礼拝堂	2016年	キリスト教文化センター
今出川校地のクリスマスツリー	クリスマス・ツリー	2016年	キリスト教文化センター
	イルミネーション点灯式	2016年	キリスト教文化センター
	クリスマス・ツリーと同志社礼拝堂、クラークチャペル	2016年	キリスト教文化センター
京田辺校地のクリスマス・ツリーとクリスマス・イルミネーション点灯式	京田辺キャンパス・ツリー	2024年	キリスト教文化センター
	クリスマス・イルミネーション点灯式（今出川）	2024年	キリスト教文化センター
	クリスマス・イルミネーション点灯式奏楽	2024年	キリスト教文化センター
	クリスマス・イルミネーション点灯式(京田辺)	2024年	キリスト教文化センター

同志社京田辺会堂光館（HIKARI-KAN）ラウンジ展示第 20 期展

「新島襄の Go Global－海を越えて－」

編集：同志社大学同志社社史資料センター
発行：同志社大学キリスト教文化センター
発行日：2024 年 9 月 30 日
ⓒDoshisha Archives Center and Center for Christian Culture